

第 1 回委員会の論点整理

＜エリアに関する論点＞

- ・ 京都の景観を大きく考えれば、まちの骨格は風致にある。景観の骨格をしっかりと理解する必要がある、その原理は社会情勢が変わっても変わるべきものではない。
- ・ 人の活力やコミュニティがしっかりしていないと景観は廃れていく。都市全体を見て、新たな拠点やエリアを色塗りし、どういうふうに関都をつくっていくかという都市ビジョンを真剣に議論しておかないと、どんどん縮退し、地域力や都市力が落ちていく。
- ・ 東京や他都市で成功しているからといって、京都でやる必要はないものもある。京都のまちの大きさは特殊なスケールで、その中に人口の10分の1の学生がいて、歴史がいろいろ積み込まれている。何を強みとして生き残るか。
- ・ 都心の再生に成功した都市、都心において景観政策を行った都市が創造都市として生き永らえ、持続可能だったのではないか。
- ・ 京都の中心部でも元学区レベルでは、人口の増減には大きな差がある。一度に大きいレベルで見るのではなく、小さな、地域に根差したレベルで景観を見ても良いのではないか。
- ・ 各地域で何を大切に、何を守っていくかを日常的に議論していくことが重要。

＜施策に関する論点＞

- ・ 景観政策を規制法から創造法へ転換していくことができないか。表面の美顔術ではなく、都市そのものを健康に成長させていく都市づくりの中での、景観づくりの展開。
- ・ 個々の開発に対して、どれだけ専門家を交えた議論がなされているのかが重要。そうした議論のレベルアップの中に「創造」が生まれていくのではないか。
- ・ まちづくりを取り巻く環境が大きく変化する中で、誰が創造していくのか、創造していく動機やインセンティブのプランニングが重要。
- ・ 今は単体に対する規制だが、隣や向かいの敷地、まちの文脈との関係性が重要。そうした関係性をルールにできないか。
- ・ 美観形成地区などの周りに合わせるものがない場所であっても、将来そのまちがどうなるかを考えて、文脈をつくっていってもらわないといけない。
- ・ どの場所も歴史とつながっている。今は見えていなくても、守るべきものを見つけて、変換していくプロセスが重要。
- ・ 新しいルールのつくり方をデザインすることが必要。全部をコントロールするのではなく、まちに住んでいる人や産業を営む人たちの感性や習慣の力を大事にしながら要所をコントロールする「ハーネシング」という手法が、景観政策にも参考になるのでは。
- ・ これから新しい風景をつくっていくときは、市民の合意形成のプロセスそのものが景観をつくっていく。「合意できる景観」をつくっていくことが一つの目的になるのでは。
- ・ 新景観政策を評価しつつ、これからは京都市が抱える問題を景観政策という手法を使っていかに誘導するかということになるのだろう。

本日も議論いただきたい事項

＜エリアについて＞

- 「京都市持続可能な都市構築プラン（仮称）」骨子（案）や景観特性を踏まえた、市内の各地域の特性や役割について
 - ― 京都における今後の「住む場所」や「働く場所」のあり方
 - ― 将来にわたって守っていくエリアと、時代の要請に合わせて変化していくエリアとのメリハリ 等

＜施策について＞

- 地域ごとの様々な個性や特色をより発揮するための施策のあり方について
 - ― 期待される都市機能等の誘導策
 - ― 新たな景観を創造するためのプロセスやルールの進化